

偉くなく、立派たれ…

「偉い坊さん（人間）になるな。立派な坊さん（人間）になれ」…この言葉は先代の住職（祖父）が生前中、私の耳にタコができるくらい、口を酸っぱくして言い聞かされた言葉であります。現在では住職（父）にも、事ある度に言われる教えであります。「偉い」とは社会的地位や名誉、お金ばかりに価値を置く人間であり、また「立派」とは、人様から尊敬を集めるだけの人格を備えた人間を指すのではないかと、私なりに解釈をしているところでもあります。しかし、だからといって今すぐに「立派な坊さんになるう」と思って、立派になれるわけではないのです。やはり普段の生活態度、立ち居振る舞いなど、その積み重ねが、その人のオーラともいべき人間力として、自然と溢れ出てくるものだと思います。その自然体でも「立派なオーラ」を放つようになる為に、一番神経を使わなければいけないのが、やはり「心の持ちよう」なのではないでしょうか。そしてその心の持ちようを「幸福」に周波数を合わせておく必要があります。そうです。

ることを思い返す時、私は幸せとはまさに主観的なものであると強く思います。幸せと感ぜられるのか感ぜられないのか、その成否はあくまでも、当人の心の状態にあるのであって、普遍的な基準など一切ないと思うのです。そしてどの様な人間にも元々、煩惱の対極に位置する、素晴らしい心根があると確信しています。それは人を助けてあげるとか、他の人のために尽くすことに喜びを覚えるといった美しい心を、誰もが心の中に持っているということでもあります。しかし煩惱があまりに強すぎると、なかなか表に出てこないのです。だからこそ努力して煩惱を抑える事が必要になってくるのです。欲を少なくし、運をいじくらないと、まこと見事な教えと出会いが自然にやってくるようになります。運との巡り合いも、トラブルの解消も、まるでピンポイントの的確な出会いによって生まれてくるのです。全てを受け入れる。楽しいことばかりを歓迎せず、辛いことも悲しい事も、嫌な人も好きな人も、みんなウエルカムです。すると辛いことが辛くなく、悲しいことが悲しいけれど苦しくなく、自分に降りかかる様々なトラブルは、実はすべて自分のせいと解つてくる。全ての出来事を全部自分のせいにしてしまえば、腹を立てて怒る事はなくなってきました。相手のせいにするから、怒りたくもなるのです。

私は次の様な言葉を信じています：『物事には何でも「時」というものがある。それは出合う「時」ということである。自分に必要な時に、必要な分だけの物であり、人であり、書物でもある。その出合う時は、一秒も早過ぎず、また一秒たりとも遅すぎず、自分にとって一番必要な「時」に出合うように世の中は出来ている。』と…。その時の自分は全く実感していなくとも、後々「ああ、そういうことだったのか。本当にありがたい体験だった…」と自然と手を合わせる日が必ずやってくることでしよう。世の中の道理とはそういうものなのです。自分にとって一番良い環境、体験を神仏様はいつも用意してくださっていることに、私達はいち早く気がつかなければいけないのです。そして気がついたその瞬間に、自分の考え方、受け止め方、即ち生き方がガラツと変わってまいります。もつと当たり前の事に喜びを感じ、喜び上手な生き方をしていきたいものです。無いものを嘆かず、ただ、たんとんと、感謝と喜びの念を積み上げていく。情熱も、考え方も、結局は心です。能力も「努力する、才能がある」なんて言うように、心によるところが大きい場合があります。結局人生の結果は心の力ともいえるのかも知れませんね。誤解を恐れずに述解すれば、極端な話、病氣は決して悪いことではありません。

せん。1人1人が幸せへと歩む道は違ふのです。病氣をすることによって、謙虚になって健康への感謝が深くなる人もおられます。周りの人が病氣をしているのを見て、「かわいそうに、早く治れば良いのにね…」と思うのは人情でしょう。しかし神仏様はその人に一番必要な勉強材料を与えて幸せを大きくしようと、一生懸命になってくれているのです。もしその病氣が必要なければ、神仏様は一瞬で病氣を解消して下さることもあります。そしてまた別の勉強材料を代りに与えてくれる事でありましょう。だから病氣で苦しんでいるのではなく、その人にとっての勉強をしているのです。だから私達は「有難うございます。南無妙法蓮華經」と、唱えて生かして頂くことに感謝する。物や、書物や、そして周囲の仲間達に心からの感謝の念をささげなければいけないのであります。

『偉いではない。幸福をいっぱい抱えた、立派な人間たれ…』

副住職 谷川 寛敬

